

津山が生んだ俳句の鬼

## 西東三鬼



新興俳句の旗手、鬼才、言葉の魔術師、俳句の鬼、様々な言葉で形容される俳人、西東三鬼。代表句「水枕がばりと<sup>※1</sup>寒い海がある」は国語の教科書に掲載されるなど多くの人に知られています。

## 俳句に出会うまで

市内南新座に生まれた三鬼は成績優秀な文学少年でした。しかし、さなだ虫のために体が弱り津山中学校の受験ができず、1年遅れで進学するという挫折を味わっています。6歳で父を、18歳でスペイン風邪により母も亡くします。三鬼は東京の長兄に引き取られ、その後、歯科医になりました。

3年ほどシンガポールで開業したこともありましたが、帰国。東京で勤務していたときに患者らに誘われ俳句を始めました。俳号「三鬼」は、サンキューのもじりといわれていますが、波乱の人生を送る彼の哀愁とユーモアが潜んでいるようです。

## 俳壇を驚かせた感覚

水枕がばりと寒い海がある

(昭和11年)

33歳で俳句入門して2年余りで発表した句です。その鋭い感覚が俳壇を騒然とさせ、伝統的な花鳥

諷詠的な俳句から離れ、季語や定型に束縛されない「新興俳句」の旗手と呼ばれるようになりました。

算術の少年しのび泣けり夏

(昭和11年)

三鬼はのちに「この句は形が奇異であったため当時の新興俳壇によく使はれた」と語っています。

緑陰に三人の老婆わらへりき

(昭和11年)

目がくらむほどの公園の明るさの中に生まれた暗い「緑陰」と「三人の老婆」という取り合わせが独特の世界を生み出しています。

## 俳句弾圧

昇降機しづかに雷の夜を昇る

(昭和11年)

ビルの中の昇降機（エレベーター）は、外で稲妻が光ついているように雷鳴がとどろいていようが無関係に静かに昇っていく。不気味な雷と機械の組み合わせで冷徹な詩の世界を作り出しています。

のちに俳句弾圧が始まり、三鬼も巻き込まれていきます。そこでは、この句も世情不安をおおるとされました。京大俳句事件<sup>※2</sup>以後、三鬼は作句を中断します。

※1 「がばりと」「ガバリと」両方の表記があります

※2 新興俳句が危険思想の温床だとして起こった俳句弾圧